

第5章 保護者アンケート調査の分析

「情報化が子どもに与える影響」についての保護者へのアンケート調査は、小学生 627 名、中学生 655 名、高校生 464 名、計 1746 名の児童・生徒の保護者から回答を得た。

この保護者調査、および次に分析する教師調査の目的は、子どもにとって最も身近な大人である保護者と教師との視点から、情報化が子どもに与える影響を客観的かつ立体的にとらえ、その現状と課題を明らかにすることである。そこで保護者調査および教師調査の分析においては、当該調査に固有の（児童・生徒調査にはない）調査項目にとくに重点を置いて分析・考察をおこない、児童・生徒調査と共通する項目については、2つ（ないし3つ）の調査結果を、適宜比較考察することとしたい。

以上の方針に基づき、次のような順序で分析・考察を進める。(1)子どもの「インターネット依存」傾向を尋ねる質問、およびインターネット利用による子どもの変化を尋ねる質問を、2つの分析軸として設定し、これらへの回答の集計結果を児童・生徒調査におけるそれと比較する。(2)2つの分析軸どうし、つまり「インターネット依存」傾向と子どもの変化との関連について分析する。ついで、2つの分析軸と(3)情報機器（コンピュータ、ゲーム機、携帯電話）の所有・使用頻度、(4)家庭・親子関係の状況、(5)インターネット利用指導、それぞれの関連についての分析と考察を順次おこなう。そして、(6)情報化が子どもに与える影響についての保護者の意識の構造を分析・考察し、最後に、(7)保護者調査全体のまとめをおこなう。

1 2つの分析軸 「インターネット依存」傾向とインターネットによる変化

1.1 「インターネット依存」傾向

子どもの「インターネット依存」傾向について尋ねた質問は下記である。

- | |
|--|
| <p>4-1：あなたのお子さんがインターネットを利用して、次のようなことがありますか。</p> <p>4-1-1 「やめなさい」と言ってもつなぎ続けることがある</p> <p>4-1-2 家族といっしょに過ごすよりインターネットにつなぐ方を好んで選ぶことがある</p> <p>4-1-3 友達と遊ぶよりインターネットにつなぐ方を好んで選ぶことがある</p> <p>4-1-4 「インターネットにつなぐ時間が長すぎる」と、注意することがある</p> <p>4-1-5 インターネットで何をしているか尋ねても隠すことがある</p> <p>4-1-6 ふだんの生活のいやなことを忘れるためにインターネットを利用しているところがある</p> <p>4-1-7 インターネットを利用している最中に話しかけたり中断させたりするとひどく腹を立てることがある</p> <p>4-1-8 インターネットからはなれると、とたんにおちこんだり不安になったりすることがある</p> <p>1.よくある 2.時々ある 3.あまりない 4.ない 5.わからない（1つに ）</p> |
|--|

この質問群の目的は、何点以上が「インターネット依存」症というような判定を個別におこなうことではなく、子どもに「インターネット依存」的な「傾向」がどの程度あると保護者が認識しているかを、統計的に分析することにある。児童・生徒調査と同様に、この回答を、『よくある』=4点、『時々ある』=3点、『あまりない』=2点、『ない』=1点として得点化し合計点を算出した¹。つまり、合計点が高い者ほど「インターネット依存」傾向が高いことになる。そして、この合計点が、小学生、中学生、高校生とも、なるべく低群7割、中群2割、高群1割に分布するように、次のようにグループ分けをした。

	小学生	中学生	高校生
高群	13点以上	17点以上	16点以上
中群	10～12点	11～16点	11～15点
低群	8～9点	8～10点	8～10点

第2節以下ではこの3分類を基本として、「インターネット依存」傾向と他の項目との関連を分析するが、その前に、「インターネット依存」傾向合計点そのものの分布が、児童・生徒調査、保護者調査、教師調査の3つでどのように異なっているかに注目しておきたい。3つの調査での「インターネット依存」傾向合計点の分布を比較したグラフが、次頁の図1-1である。これを見ると、「インターネット依存」傾向についての児童・生徒自身の自己認識と、保護者や教師の認識とのあいだにかなりのギャップがあることがわかる。たとえば小学生の場合、8点（つまり、すべての質問に「ない」と回答したもの）の割合は、児童は24.5%にすぎないが、保護者は63.5%、教師は56.8%にのぼる。これに対し、10点以上の得点ではほとんどの場合、児童の比率が保護者・教師の比率を上回っている。この傾向は、中学生・高校生の場合にもまったく同様に認められる。

すなわち、「インターネット依存」傾向を児童・生徒が自己認識している度合に対し、保護者・教師の認識の度合は明らかに低いのである。以下の分析・考察にあたっては、この認識のギャップをまず念頭においておく必要がある。

¹ 8つの質問項目で、1つでも「わからない」または無回答があるものは除外した。

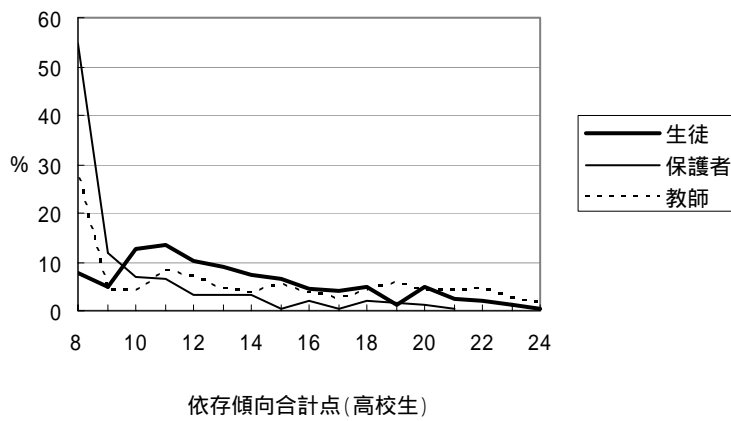
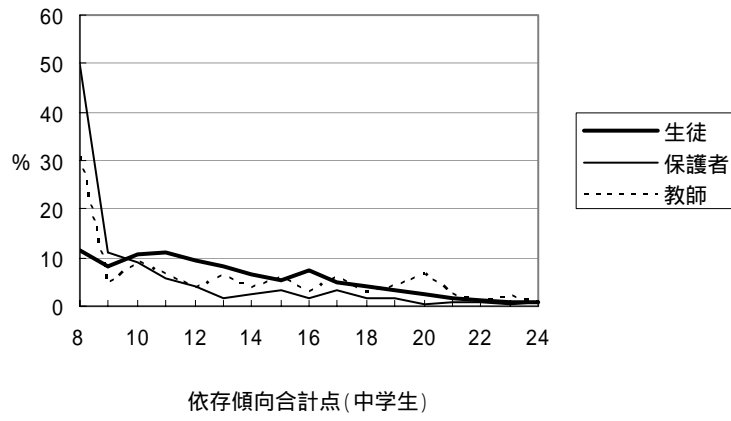
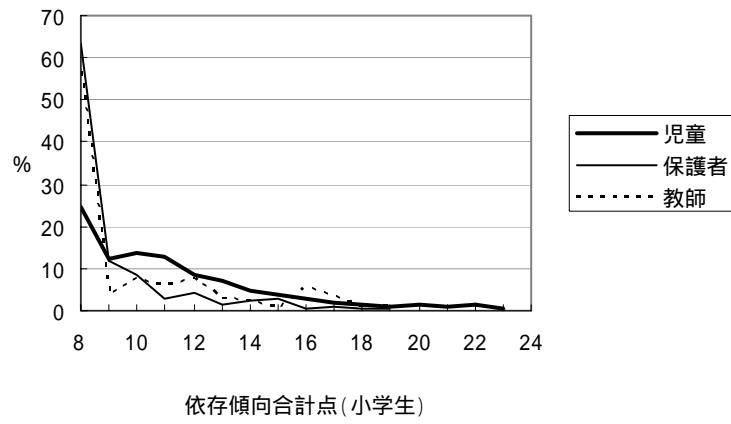


図 1 - 1 依存傾向合計点の分布

1.2 インターネット利用による子どもの変化

インターネット利用による子どもの変化については、下記のような質問をした。

- 4-2：インターネット（メールを含む）利用がきっかけで、お子さんに以下のような変化が見られるようになりましたか？（いくつでも）
- | | |
|---------------------|---------------------|
| 1．疲れやすくなった | 2．疲れやすくなった |
| 3．イライラする | 4．イライラしなくなった |
| 5．睡眠時間がへった | 6．睡眠時間が増えた |
| 7．性格が荒っぽくなった | 8．性格がおだやかになった |
| 9．自分の言いたいことが言えなくなった | 10．言いたいことが言えるようになった |
| 11．勉強を前よりしなくなった | 12．勉強を前よりするようになった |
| 13．学校が前より好きでなくなった | 14．学校が前より好きになった |
| 15．家族との会話がへった | 16．家族との会話が増えた |
| 17．友人の数がへった | 18．友人の数が増えた |
| 19．友人と話すことがへった | 20．友人と話すことが増えた |
| 21．生活の楽しみがへった | 22．生活の楽しみが増えた |
| 23．特に以前と変わったところはない | |
| 24．その他（具体的に： _____） | |

これらすべての選択枝の回答について個別に分析することは統計的にあまり意味がないため、やはり児童・生徒調査と同様に、まずプラスの変化（選択枝 2～22 の偶数番）およびマイナスの変化（選択枝 1～21 の奇数番）のそれぞれについて の数を合計して、「プラス変化合計点」および「マイナス変化合計点」を算出した。そして、小学生、中学生、高校生とも、できるだけ低群 7 割、中群 2 割、高群 1 割に分布するように、次のようにグループ分けをした。

		小学生	中学生	高校生
プラス変化	高群	2 点以上	2 点以上	2 点以上
	中群	1 点	1 点	1 点
	低群	0 点	0 点	0 点
マイナス変化	高群	2 点以上	2 点以上	2 点以上
	中群	1 点	1 点	1 点
	低群	0 点	0 点	0 点

この「プラス変化合計点」および「マイナス変化合計点」の分布については、児童・生徒調査と保護者調査とのあいだに、あまり顕著な差異は認められなかった（ただし、教師調査においては差異が認められたので、これについては教師調査の分析で述べる）。

2 「インターネット依存」傾向と子どもの変化

ここでは、保護者調査全体の2つの分析軸どうし、つまり、「インターネット依存」傾向と子どものプラス・マイナスの変化とが互いにどのように関連しているかを分析したい。そこでまず、「インターネット依存」傾向、マイナス変化、プラス変化（いずれも低・中・高の3群）相互の順位相関係数を計算した結果が、次の表である²。

表2 - 1 依存傾向、プラス変化、マイナス変化の関連

(Spearman の順位相関係数)

	小学生	中学生	高校生
依存傾向 × プラス変化	.234(**)	.229(**)	.309(**)
依存傾向 × マイナス変化	.353(**)	.418(**)	.366(**)
プラス変化 × マイナス変化	.148(**)	.244(**)	.301(**)

**p<0.01

すべての学校段階において、「インターネット依存」傾向とプラス・マイナス両面の変化、およびプラス変化とマイナス変化どうしが、正の相関を示している。このことは、保護者の認識において、「インターネット依存」傾向の高い子どもは、マイナス変化のみならずプラス変化も同様に大きいということを意味する。これは、児童・生徒調査の結果（第3節）とも一致している。つまり、子ども自身の自己認識と同様に、保護者の視点から見た場合も、「インターネット依存」傾向の強い子どもは、インターネット利用をきっかけにプラス・マイナス両面の変化を示す傾向が強いということである。このことは、子どものインターネット利用においても、情報化が必然的に「光」と「影」の両面を同時にもたらしているという現実を示唆している。ただ、相関係数の値をみると、「インターネット依存」傾向とマイナス変化との相関が、一貫して最も高い値を示している。つまり、「インターネット依存」傾向の強い子どもの場合、保護者は子どものプラス変化よりもマイナス変化のほうをより強く認識していることがわかる。

なお、ここで子どもの「変化」の内容についても若干の考察を加えておきたい。保護者の回答で一貫して上位を占めた項目を、表2 - 2にまとめた。プラス面では主として「生活の楽しみが増えた」「友人が増えた」「家族、友人との会話が増えた」などが、マイナス面では主として「睡眠時間が減った」「勉強しなくなった」などが一貫してあげられている（この結果は、児童・生

² いずれも低群 = 1、中群 = 2、高群 = 3 とコード化した。

徒調査とも一致している)。つまり、子どものインターネット利用は、日常生活を豊かにし、家族や友人とのコミュニケーションを活性化させる側面をもつ一方で、日常生活の基礎である生活時間や学習に支障をもたらす可能性もはらんでいる、ということである。前者のプラス面を伸ばしつつ、後者のマイナス面をいかにコントロールしていくかが、情報化が進む中での、今後の家庭教育の課題として求められているといえよう。

表2 - 2 インターネット利用をきっかけとした子どもの変化(上位項目)³

		小学生	中学生	高校生
プラス変化	生活の楽しみが増えた	13.6%	18.8%	19.0%
	友人が増えた	2.2%	7.0%	6.9%
	友人と会話が増えた	2.2%	5.8%	6.9%
	家族と会話が増えた	4.6%	6.3%	5.6%
マイナス変化	睡眠時間が減った	2.1%	13.6%	12.1%
	勉強しなくなった	1.9%	6.1%	5.4%

3 情報機器の所有・使用頻度との関連

次に、子どもの情報機器(コンピュータ、ゲーム機および携帯電話)の所有および使用頻度と、「インターネット依存」傾向との関連を分析したい。コンピュータの所有や使用頻度が、「インターネット依存」傾向やプラス・マイナスの変化と相関していることは容易に予想されるが、他の情報機器に関してはどうだろうか。3種類の情報機器の所有・使用頻度と、「インターネット依存」傾向や変化との相関について比較・分析するのが、本節の目的である。

情報機器の所有状況および使用頻度を尋ねた質問は、下記のとおりである。

2-1: あなたのお子さんは次のものを持っていますか?

- | | | | |
|-----------------|------------|----------|-------|
| 2-1-1: コンピュータ | 1. 自分専用がある | 2. 家族と共用 | 3. ない |
| 2-1-2: ゲーム機 | 1. 自分専用がある | 2. 家族と共用 | 3. ない |
| 2-1-3: 携帯電話・PHS | 1. 自分専用がある | 2. 家族と共用 | 3. ない |

2-2: お子さんは次のものを1週間に何日ぐらい使っていると思いますか

(家や学校など場所はどこでもよい)

- | | | | | | |
|---------------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 2-2-1: コンピュータ | 1. 6日以上 | 2. 4~5日 | 3. 2~3日 | 4. 1日以下 | 5. 使わない |
|---------------|---------|---------|---------|---------|---------|

³ おおむね、高校生保護者で5%以上の解答があった項目を、高校生保護者の回答率の高い順に並べ替えた。

2-2-2：ゲーム機	1.6日以上	2.4~5日	3.2~3日	4.1日以下	5.使わない
2-2-3：携帯電話・PHS	1.6日以上	2.4~5日	3.2~3日	4.1日以下	5.使わない

これらの質問への回答と、「インターネット依存」傾向およびインターネット利用による子どもの変化との関連について順位相関係数を算出し、その結果を表3 - 1に示した（有意な相関がみられなかったセルは値を省略）。

表3 - 1 機器所有・使用頻度と「インターネット依存」傾向との関連

(Spearmanの順位相関係数)

		小学生	中学生	高校生
コンピュータ所有 ×	依存傾向	.129 (*)	.216 (**)	.250 (**)
	プラス変化	.198 (**)	.125 (**)	.131 (**)
	マイナス変化		.245 (**)	.162 (**)
コンピュータ使用頻度 ×	依存傾向	.394 (**)	.341 (**)	.426 (**)
	プラス変化	.278 (**)	.198 (**)	.231 (**)
	マイナス変化	.188 (**)	.347 (**)	.211 (**)
ゲーム機所有 ×	依存傾向			
	プラス変化			
	マイナス変化		.095 (*)	
ゲーム機使用頻度 ×	依存傾向			.184 (*)
	プラス変化			
	マイナス変化			
携帯電話所有 ×	依存傾向			
	プラス変化			
	マイナス変化		.107 (**)	
携帯電話使用頻度 ×	依存傾向			-.154 (*)
	プラス変化			
	マイナス変化		.155 (**)	

**p<0.01, *p<0.05

予想どおり、コンピュータの使用および使用頻度と、「インターネット依存」傾向およびプラス・マイナスの変化とのあいだには、ほとんどのセルで明確な相関がみられた。つまり、自分専用のコンピュータを所有し、あるいはコンピュータの使用頻度が高い子どもは、「インターネット依存」傾向やプラス・マイナスの変化を示す割合も高い、ということである。

ゲーム機の所有・利用と、「インターネット依存」傾向やプラス・マイナスの変化とのあいだには、ほとんど相関がみられなかった。この結果は児童・生徒調査（第2節）の分析結果とも一致している。

しかし携帯電話に関しては、児童・生徒調査の結果と差異がみられる。児童・生徒調査では小学生の場合にのみ、携帯電話の所有・使用と「インターネット依存」傾向やプラス・マイナスの変化とのあいだに明確な相関がみられたが、保護者調査ではそれがまったくみられない。一方、

中学生の場合には、児童・生徒調査においてはまったくみられなかった携帯電話所有・使用頻度とマイナス変化との相関が、保護者調査では（相関係数の値は必ずしも大きくないが）明瞭にみられる。

この差異は、次のように解釈することができよう。まず、児童・生徒調査でも指摘されたように、小学生にとって携帯電話は、コンピュータと同様に、所有率の低さという点で「特別な」コミュニケーション・ツールであり、かつ両者は、インターネットに接続可能な機器という点で共通している。さらに携帯電話は、その物理的な小ささと可搬性の高さのゆえに、コンピュータ以上に個人的なコミュニケーション・ツールである。そのため、携帯電話を所有し使用頻度の高い小学生は、自分では「インターネット依存」傾向やプラス・マイナスの変化を自覚しているのに対し、保護者はそれらを見逃しているのではないか（たとえ変化に気づいても、それをインターネット利用の結果としては認識していないのではないか）と考えられる。

ただ、以上の解釈は、中学生の場合、逆に保護者調査でのみ携帯電話所有・利用とマイナス変化との相関がみられた点とは、一見矛盾しているようにみえる。このことを説明するには、「マイナス変化」の内容を考慮する必要がある。第2節の表2 - 2でみたように、マイナス変化の項目では、小学生・中学生・高校生とも一貫して「睡眠時間が減った」「勉強しなくなった」の2つが1、2位を占めている。ただしこの2つの変化が「みられるようになった」とする保護者の比率は、中学生の段階で飛躍的に増加している（「睡眠時間が減った」は、小学生 2.1%、中学生 13.6%、高校生 12.1%）。また、携帯電話の所有率も同様に、中学生になると小学生より格段に増加する（「自分専用」は、小学生 12.1%、中学生 34.7%、高校生 83.8%）。このため保護者は、睡眠時間減少や勉強嫌いなどの目にみえるマイナス変化を、子どもが中学生になってはじめて所有するようになった携帯電話の使用と、しばしば結びつけて認識しているのではないかと考えられる。それに対し中学生自身は、携帯電話の所有・使用と、インターネット利用によるマイナス変化とを、結びつけて認識してはいないと解釈できる。

さらに高校生になると、携帯電話の所有・使用がごく一般化してしまうため、高校生自身もその保護者も、それをあえて「インターネット依存」傾向やマイナス変化と結びつけては認識しなくなっていると思われる。

4 家庭・親子関係の影響

ここでは、「インターネット依存」傾向およびプラス・マイナスの変化に影響を与えると予想される他の重要な変数として、家庭・親子関係の状況に注目したい。これに注目するのは、「イ

「インターネット依存」症も含めた行為依存 = 行為嗜癮 (behavioral addiction) は、人間関係ないしコミュニケーションの病理とみることができるからである。つまり、家庭・学校・職場などでの人間関係の問題が、そこからの逃避として、さまざまな行為依存をひきおこすのではないかと考えられる。ここではこのような観点から、子どもにとってとりわけ「重要な他者」である保護者との関係、あるいは家庭環境の問題が、「インターネット依存」傾向やマイナス変化の少なくとも一因となっているのではないかという仮説を提示し、これを検証したい。

親子関係および家庭環境の状況について尋ねた質問は、下記の7問である⁴。

- 1-4: 子どもから悩み事について相談を受けることはありますか。
1. よくある 2. ときどきある 3. あまりない 4. ない
- 1-5: 子どもとのコミュニケーションは十分とれていると思いますか。
1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う
3. どちらかといえばそう思わない 4. そう思わない
- 1-6: ふだん、子どものありのままの姿を認めてあげていると思いますか。
1. 認めてあげている 2. どちらかといえば認めてあげている
3. どちらかといえば認めてあげていない 4. 認めてあげていない
- 1-7: 子どもの外出先を把握していると思いますか?
1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う
3. どちらかといえばそう思わない 4. そう思わない
- 1-8: 子どもの友人を知っていると思いますか?
1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う
3. どちらかといえばそう思わない 4. そう思わない
- 1-9: 子どもが学校へ行きたくないそぶりをみせたことがありますか?
1. たびたびある 2. 何回かある 3. 1回だけあった 4. 昔からあった 5. ない
- 1-11: 子どもはいつから自分ひとりの^{へや}部屋をもつようになりましたか? (1つに)
1. 小学校入学前 2. 小学校1,2年 3. 小学校3,4年 4. 小学校5,6年
5. 中学校 6. 高校 7. 自分の部屋をもっていない

これらの質問への回答と、「インターネット依存」傾向(低・中・高) および子どもの変化(プラス面・マイナス面それぞれ低・中・高)との関連について、順位相関係数を算出した。その結果を表4-1に示す⁵。

⁴ 不登校の傾向を尋ねる1-9は、親子関係・家庭環境と直接には関係がないように見えるが、子どもをめぐる人間関係の状況を知るための重要な変数としてここに加えた。

⁵ 有意な相関が見られなかったセルは、相関係数の値を省略した。質問1-4(悩み相談)については、まったく相関が見られなかったためすべて省略した。なお、順序尺度化するため、質問1-9の「4.昔からあった」を欠損値とみなし計算から除外した。

表4 - 1 家庭・親子関係と依存傾向および変化との関連

(Spearman の順位相関係数)

		小学生	中学生	高校生
コミュニケーション ×	依存傾向	-.109(**)	-.151(**)	
	プラス変化	.104(**)	.087 (*)	
	マイナス変化		-.086 (*)	
ありのままの姿 ×	依存傾向		-.214(**)	
	プラス変化			
	マイナス変化		-.110(**)	
外出先把握 ×	依存傾向		-.134(**)	
	プラス変化	.108(**)		
	マイナス変化			
友人を知っている ×	依存傾向			
	プラス変化	.112(**)		
	マイナス変化			
学校へ行きたくない ×	依存傾向		.137(**)	
	プラス変化			
	マイナス変化	.085 (*)		.134(**)
個室 ×	依存傾向			
	プラス変化			
	マイナス変化		-.095 (*)	

**p<0.01, *p<0.05

この表から読み取れるのは、主として次の4点である。

小・中学生においては、保護者と子どもとのコミュニケーションがうまくとれているほど、子どもの「インターネット依存」傾向が低く、またインターネット利用によるプラス変化が多い。また中学生においては、保護者が子どものありのままの姿を認めているほど、子どもの「インターネット依存」傾向が低く、またインターネット利用によるマイナス変化が少ない。小学生においては、保護者が子どもの外出先をよく把握しているほど、また子どもの友人をよく知っているほど、インターネット利用によるプラス変化が多い。不登校の傾向を示す子どもは、小学生・高校生ではインターネット利用によるマイナス変化が多く、中学生では「インターネット依存」傾向が高い。早くから個室を与えられたかどうかは、「インターネット依存」傾向とは関係がない。

により、「保護者との関係や家庭環境の問題が「インターネット依存」傾向の一因となっているのではないか」という先述の仮説は、小・中学生に関しては検証されたといえる。も加味して考察すれば、とくに自我の形成途上にある小・中学生の場合、(学校生活の問題も含め

て) 子どもをめぐる人間関係の状況に問題があると、そこからの逃避として「インターネット依存」傾向が生じ、またインターネット利用によるマイナス変化が多くなっているとみることができ。以上の結果は、児童・生徒調査(第1節)の分析結果とも合致している。

このことをさらに詳細に検証するために、最も明確な相関がみられた中学生を例にとり、「コミュニケーション」「ありのままの姿」と、「インターネット依存」傾向の8項目すべてとの順位相関係数を算出してみた。結果を表4-2に示す(有意な相関がみられなかったセルの値は省略)。

表4-2 家庭・親子関係と個々の依存傾向との関連(中学生)

(Spearmanの順位相関係数)

	コミュニケーション	ありのままの姿
禁止してもつなぎ続ける	-.140(**)	-.159(**)
家族よりインターネット	-.220(**)	-.243(**)
友達よりインターネット	-.155(**)	-.209(**)
時間が長すぎる	-.158(**)	-.219(**)
何をしているか隠す	-.157(**)	-.135(**)
嫌なことを忘れる	-.127(**)	-.157(**)
中断されると怒る	-.159(**)	-.200(**)
離れると不安	-.122(*)	

**p<0.01, *p<0.05

ほとんどすべてのセルにおいて相関がみられるが、注目されるのは、「インターネット依存」傾向のなかでも「家族といっしょに過ごすよりインターネットにつなぐ方を好んで選ぶことがある」という項目で、最も相関係数の絶対値が大きくなっている点である。つまり、中学生においては、保護者と子どもとのコミュニケーションがうまくとれておらず、また保護者が子どものありのままの姿を認めていない場合、「インターネット依存」傾向のなかでもとくに、家族から離れインターネットに逃避する傾向が強く現れるということである。この結果は、先述の仮説を補強しているといえよう。

5 インターネット利用指導との関連

以上の分析・考察で、子どもの「インターネット依存」傾向や変化を保護者がどのように認識しているか、および「インターネット依存」傾向や変化が、情報機器の所有・使用状況および家

庭・親子関係とどのように関連しているかが、ほぼ明らかになったといえよう。では、子どもの「インターネット依存」傾向やマイナス変化を認識した場合、それに対して保護者はどのように対処しているのだろうか。それを明らかにするため、本節では、インターネット利用についての指導の状況と、「インターネット依存」傾向およびプラス・マイナスの変化との関連を分析したい。

インターネットの利用指導（携帯電話も含む）について尋ねた質問は下記のとおりである。

- 3-3：コンピュータやインターネット（メールを含む）の適切な使い方について、お子さんに何らかの指導をしていますか。
 3-6：携帯型電話の適切な使い方について、お子さんに何らかの指導をしていますか。
- 1．頻繁に指導している 2．時々指導している
 3．指導していない 4．子どもはコンピュータやインターネットを使っていない

これらの問いの回答を「頻繁に指導」=3点、「時々指導」=2点、「指導していない」=1点、としてそれぞれ点数化した（「使ってない」は計算から除外した）。そのうえで、指導の頻度と「インターネット依存」傾向およびプラス・マイナスの変化との順位相関係数を計算した結果を表5 - 1に示す（有意な相関がみられなかったセルは値を省略）。

表5 - 1 指導の頻度と依存傾向・変化との関連

（Spearman の順位相関係数）

		小学生	中学生	高校生
PC・ネット指導頻度 ×	依存傾向	.283(**)	.264(**)	
	プラス変化	.234(**)	.133(**)	.156(**)
	マイナス変化	.103 (*)	.159(**)	
携帯電話指導頻度 ×	依存傾向	.208 (*)	.147 (*)	
	プラス変化			
	マイナス変化		.131 (*)	

**p<0.01, *p<0.05

小・中学生の場合は、「インターネット依存」傾向・プラス変化・マイナス変化が大きいほど、コンピュータ・インターネットについての指導頻度も高くなっている。また、「インターネット依存」傾向が大きいほど、携帯電話についての指導頻度も高くなっている。ただし携帯電話についての指導頻度は、コンピュータ・インターネットについて指導頻度ほど、「インターネット依存」傾向やプラス・マイナスの変化との相関は明確ではない。

問題は、これらの相関の意味をどう解釈すべきかという点にある。これらの相関を、ただちに「子ども（小・中学生）の「インターネット依存」傾向やマイナス変化が大きい場合、保護者はそれに対応して指導の頻度を上げている」と解釈することはできない。というのも、指導の頻度は、子どものインターネット利用頻度、あるいは保護者自身のインターネット利用頻度といった他の変数からも影響を受けていることが十分に予想されるからである。

そこで、独立変数として、「インターネット依存」傾向、マイナス変化、子どものコンピュータ使用頻度、および保護者のインターネット利用頻度の4つを選び、それぞれがコンピュータ・インターネットについての指導頻度にどの程度影響を及ぼしているかを分析したい。ただし、保護者のインターネット利用頻度は子どもの使用頻度にも、子どもの使用頻度は「インターネット依存」傾向・マイナス変化にも、それぞれ影響を及ぼしていると予測されるため、小学生、中学生、高校生それぞれの保護者について次頁図5 - 1 ~ 5 - 3のような因果関係のモデルを作成し、パス解析をおこなった。矢印の数値（標準化係数）は、因果関係または相関の強さをあらわしている⁶。なお、保護者のインターネット利用頻度について尋ねた質問は下記である。

2-8：あなた自身は勤務先や自宅等でインターネット（メールを含む）を利用していますか。

- 1．頻繁に利用している 2．時々利用している 3．利用していない

パス解析の結果、指導頻度に最も大きな影響を与えている要因は、小中学生の保護者においては「インターネット依存」傾向であるが、高校生の保護者においては「インターネット依存」傾向の影響はほとんどなく、主として子どものコンピュータ・インターネットの使用頻度が影響を与えていることがわかった（図中、太い矢印で示した）。なお、保護者のインターネット利用頻度は、いずれもあまり指導頻度には直接には影響していなかった。

また、保護者のインターネット利用頻度が子どものコンピュータ使用頻度に与える影響については、学校段階が上がるほど小さくなっている点も注目される。つまり、学校段階が上がるほど、子どもはコンピュータ・インターネットの利用に関しても保護者の影響から離れ、独立して利用するようになるということである。

以上の結果は、小中学生の保護者は、子どもに「インターネット依存」傾向が強い場合には指導の頻度を高めて対応しているが、高校生の保護者はそうではなく、単に使用頻度の高い場合に指導頻度を高めているということを意味する。このことは、子どもの年齢が高くなるほど、保護

⁶ 円形は誤差変数（この因果関係のモデルでは説明できない変動を生む要因）をあらわす。

者が子どものインターネット利用状況や問題にきめ細かく対応した指導をおこなうことが困難になっていることを示唆していると考えられる。

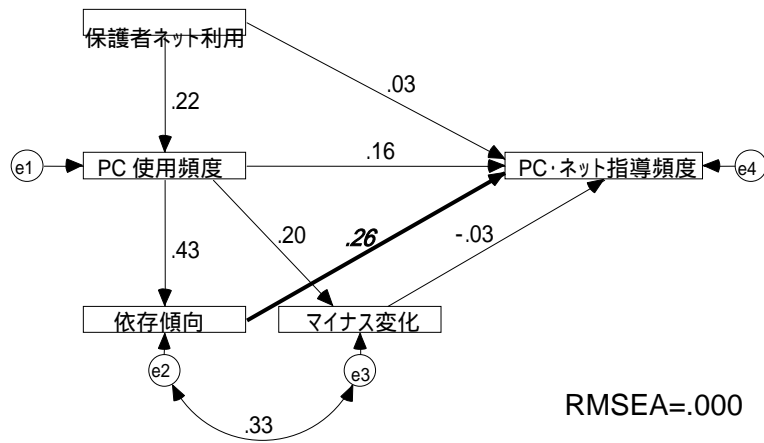


図 5 - 1 小学生保護者

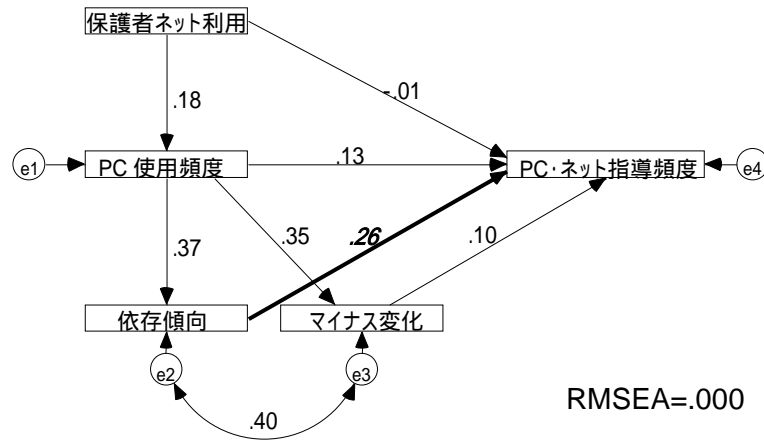


図 5 - 2 中学生保護者

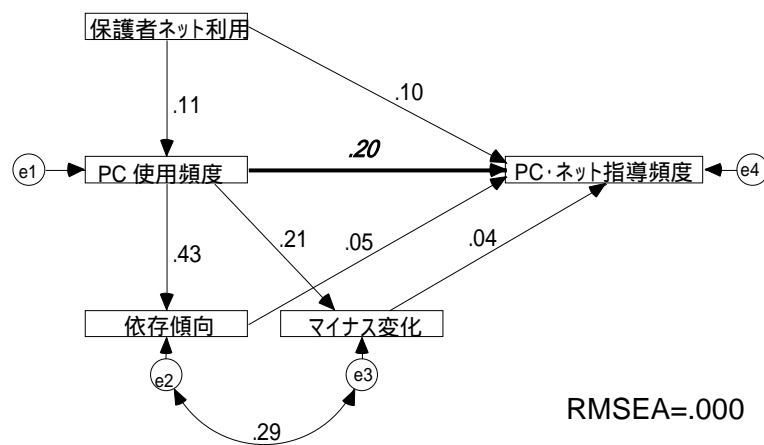


図 5 - 3 高校生保護者

6 保護者の意識の構造

以上の考察を踏まえ、保護者調査の分析枠組全体の検証を兼ねて、子どものインターネット利用についての保護者の意識の全体構造を明らかにしたい。ここで新たに分析対象として加える変数は下記のとおりである。

子どものコンピュータ使用時間の変化

2-4：あなたのお子さんはコンピュータを使う時間は長くなっていますか？

- 1．だんだん使う時間が長くなっている
- 2．変わらない
- 3．だんだん短くなっている

家庭の情報環境

2-5：あなたのご自宅ではインターネットを利用できますか。

- 1．常時接続して利用
- 2．必要なときに接続して利用
- 3．利用していない

保護者のコンピュータ利用頻度

2-7：あなた自身は勤務先や自宅等でコンピュータを利用していますか。

- 1．頻繁に利用している
- 2．時々利用している
- 3．利用していない

子どものインターネット利用のメリット/デメリットの評価

3-1：インターネット（メールを含む）は、お子さんにとってメリットとデメリットのどちらが大きいと思いますか。

- 1．メリットが大きい
- 2．どちらかといえばメリットが大きい
- 3．どちらかといえばデメリットが大きい
- 4．デメリットが大きい

子どものインターネット利用にあたっての心配

3-2：お子さんが、インターネット（メールを含む）を使用するにあたって、「非常に心配」だと思ふことは何ですか。（いくつでも）

- 1．セックスや暴力、犯罪など有害な情報に接して、心の健全さを害する可能性
- 2．使いすぎにより、運動不足や視力の後退をもたらす可能性
- 3．使いすぎにより、生活や勉強に支障をきたす可能性
- 4．詐欺や誹謗中傷などの不正行為の被害者になる可能性
- 5．詐欺や誹謗中傷などの不正行為の加害者になる可能性
- 6．家族または友人などとの人間関係が希薄になる可能性
- 7．見知らぬ人と知り合っただけで不適切な人間関係が生じる可能性
- 8．生活や勉強から、インターネットの世界へ逃避する可能性

観測変数として、前節までで検討した変数に上記の変数を加え、さらにそれらに基づいて、次の5つの潜在変数を構成し、共分散構造分析を行った。

潜在変数名	構成要素となる観測変数
ネット利用の心配	質問 3-2 の回答 (8 項目)
家庭情報環境	家庭のインターネット接続回線 (常時接続かどうか) 保護者のコンピュータ利用頻度、インターネット利用頻度
PC・ネット利用	子どものコンピュータ使用頻度、使用時間の变化
家庭・親子関係	子どもとのコミュニケーションの満足度、ありのままの姿を認めているか、外出先を把握しているか、友人を知っているか
ネット依存傾向	依存傾向の 8 項目、プラス変化・マイナス変化 (低・中・高)

この 5 つの潜在変数に、観測変数である「メリット/デメリット (の評価)」を組み合わせ、子どものインターネット利用に対する保護者の意識の全体構造を表現するためのモデルを、主として次の 2 つの観点から作成した。(1)「メリット/デメリット」に対して、「インターネット利用の心配」「家庭情報環境」「PC・インターネット利用」および「インターネット依存」傾向が、それぞれの程度影響をおよぼしているか。(2)「インターネット依存」傾向に対して、「家庭・親子関係」および「(子どもの)PC・インターネット利用」がそれぞれの程度影響をおよぼしているか。

そのモデルおよび結果を、小学生保護者・中学生保護者・高校生保護者ごとに、図 7 - 1、7 - 2、7 - 3 に示した⁷。全体的には小・中・高校生保護者ともに同様の傾向がみられるが、部分的にはいくつか差異も存在する。この分析の結果明らかとなった保護者の意識の構造の特徴は、ほぼ次のようにまとめられよう。

(1) インターネット利用のメリット/デメリットの評価に与える影響について (以下、メリット評価への影響を「プラス影響」、デメリット評価への影響を「マイナス影響」と表現する)。

小学生保護者では「インターネット利用の心配」のマイナス影響が最も大きく、「PC・インターネット利用」「家庭情報環境」のプラス影響がそれに次ぎ、「インターネット依存」傾向の影響はほとんどない。それに対し、中学生・高校生保護者では「PC・インターネット利用」のプラス影響が最も大きい、「インターネット依存」傾向のマイナス影響の大きさがほとんどそれと等しく、「インターネット利用の心配」のマイナス影響は小さくなる。以上の結果は次のことを意味している。 小学生の場合は子どものインターネット利用そのものよりも、インターネット

⁷ 潜在変数は楕円形で表示されている。解釈上、注目される部分は因果関係を示す矢印を太く、かつ数字 (標準化係数) を斜体で表示した (必ずしも数値の大きさを意味するものではない)。なお RMSEA (平均二乗誤差平方根) の値はいずれも 0.05 を若干上回っているが、0.08 未満であればモデルはデータに適合しているとみなす学説もあるので、ここではおおむね適合しているものとみなす。図の読み方について詳しくは児童・生徒調査第 5 節を参照。

のネガティブな側面についての保護者の一般的な知識がマイナス評価に結びつくが、中学・高校生になると、そうした一般的な知識よりも、子どもの実際の「インターネット依存」傾向がマイナス評価に結びつくようになる。 子ども自身や保護者のコンピュータ・インターネットの利用頻度が高いほどプラス評価が強くなるという点は、小・中・高で一貫している。

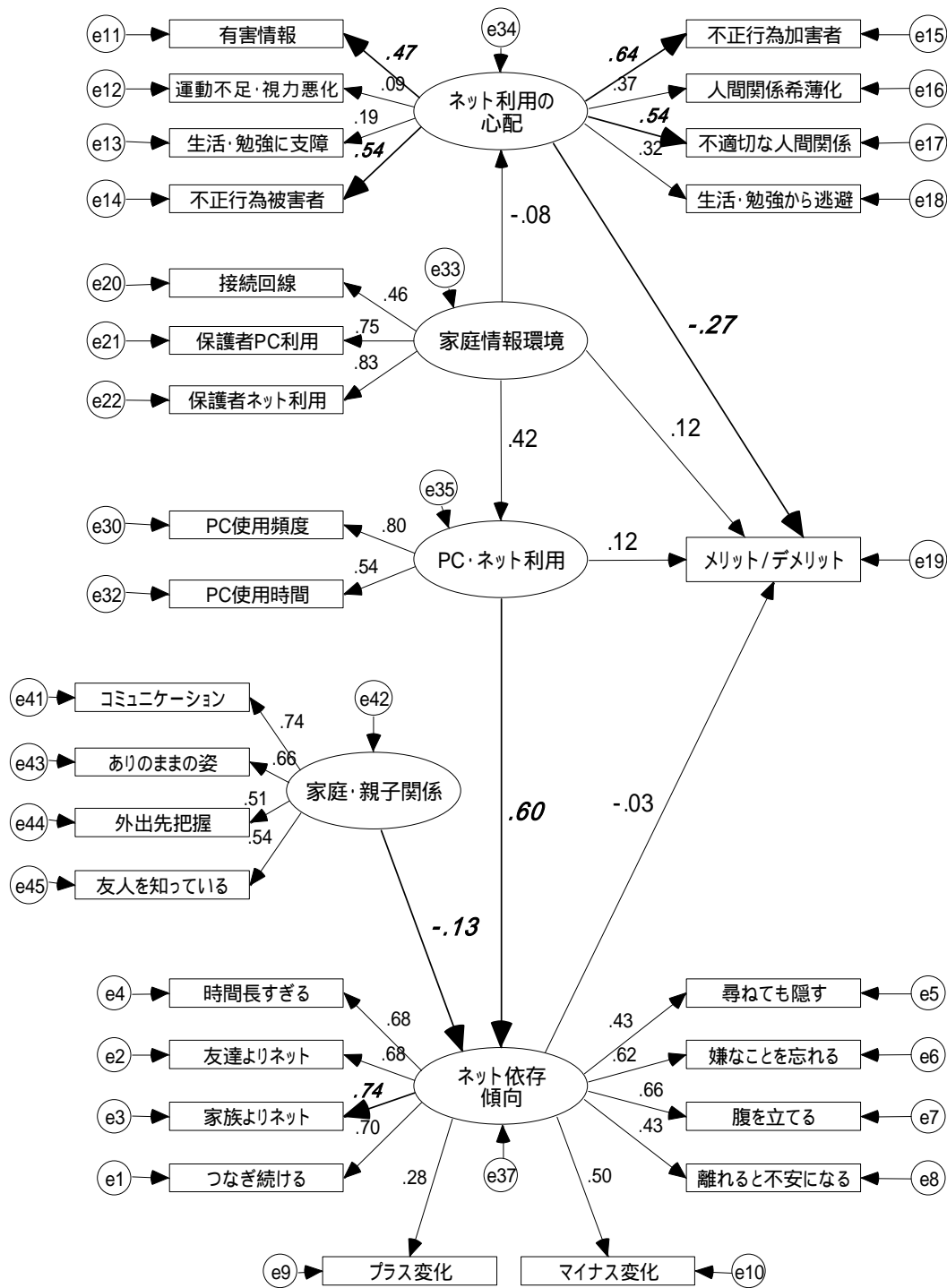
なお「インターネット利用の心配」の構成要素のなかでは、「有害情報」「不正行為被害者」「不正行為加害者」「不適切な人間関係」の比重が一貫して大きい。保護者の意識のなかでは、子どものインターネット利用が逸脱行動に結びつく危険性の認識が、マイナス評価に結びついて
いることがうかがえる。

(2)「インターネット依存」傾向への影響について。

まず、「(子どもの)PC・インターネット利用」が「インターネット依存」傾向に与える影響は一貫して大きく、利用頻度が高くなるほど「インターネット依存」傾向も強くなるという関係が明確にみとれる。

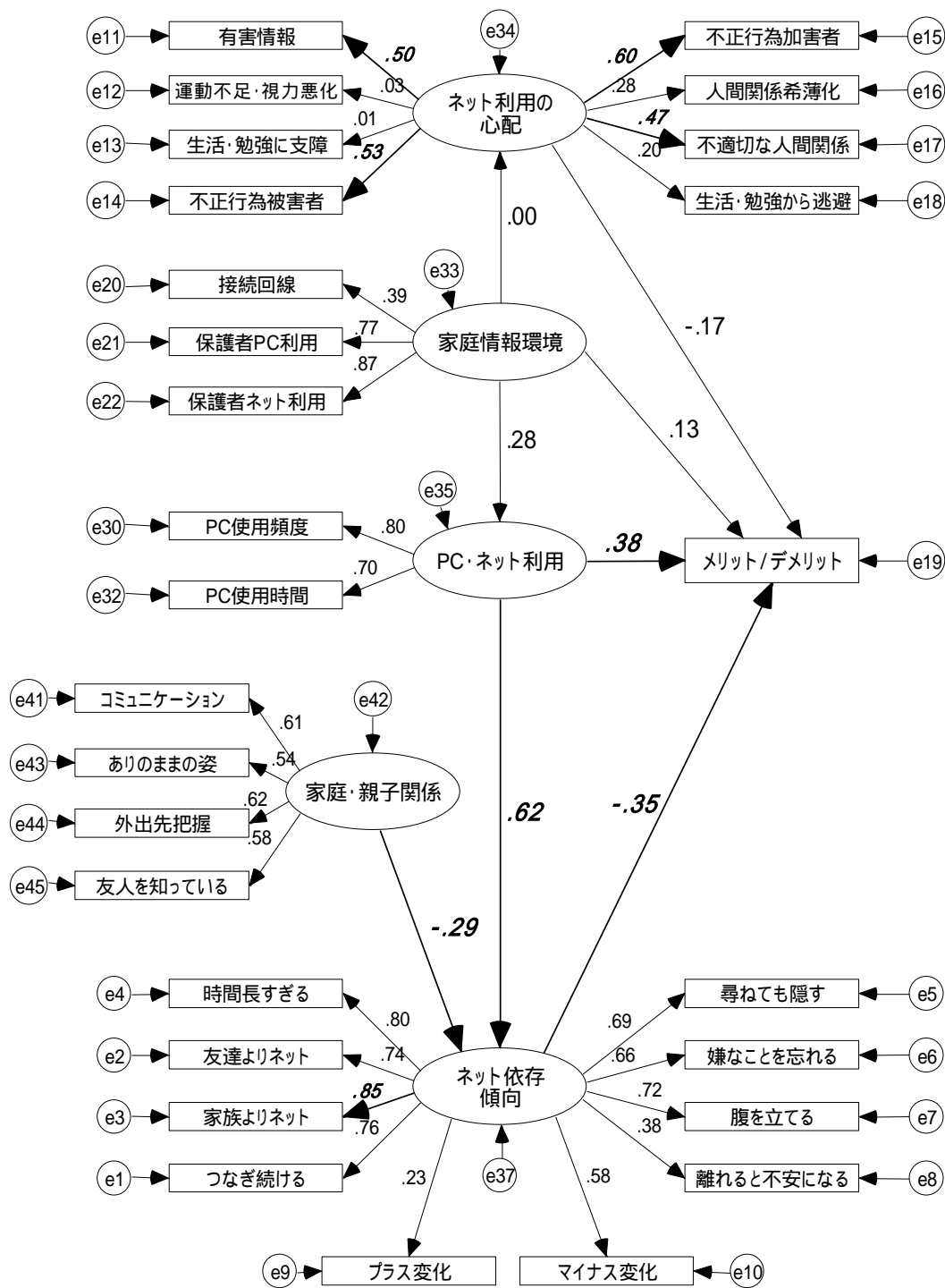
「家庭・親子関係」が「インターネット依存」傾向に与える影響もほぼ一貫しており、とくに中学生保護者の場合に最も大きい。第4節でもみたように、家庭・親子関係が良好であれば、
「インターネット依存」傾向は低くなるという傾向がここからもみとれる。児童・生徒調査(第5節)での「インターネットの健全な利用のためには家庭・親子関係が重要な役割を担っている」という結論は、保護者調査からも同様に導き出されたといえよう。

なお、「インターネット依存」傾向の構成要素のなかでは、「家族よりインターネット」の比重が一貫して最も大きい。これは、保護者にとって子どもの「インターネット依存」傾向を最も強く認識するのが、「家族と過ごすよりもインターネットにつなぐ方を好む」場合であるということの意味している。しかし、より注目されるのは、高校生の場合、「腹を立てる」(「インターネットを利用している最中に話しかけたり中断させたりするとひどく腹を立てることがある」)の比重がそれと同じくらい大きくなっていることである(小・中学生の場合、この項目の比重はあまり大きくない)。この点も児童・生徒調査の結果と一致し、子どもの年齢が上がるにつれて、
日常生活世界を忌避しインターネットの世界に逃避・没頭する態度が、しだいに「インターネット依存」傾向の中心としてあらわれてくることを示唆している。



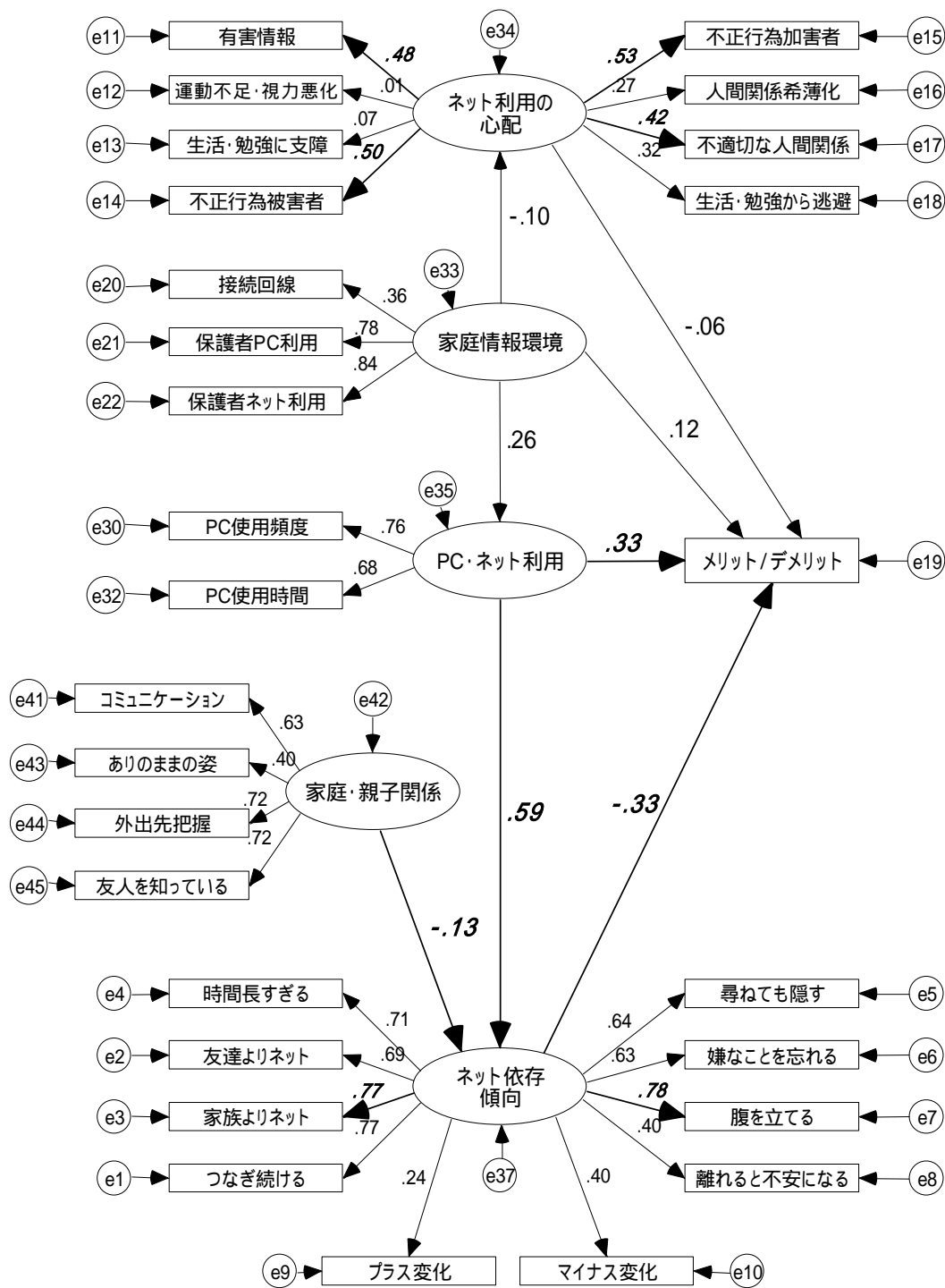
RMSEA = .059

図 7 - 1 小学生保護者モデル



RMSEA = .055

図 7 - 2 中学生保護者モデル



RMSEA = .055

図 7 - 3 高校生保護者モデル

7 保護者調査のまとめ

以上、この保護者調査全体の分析と考察をとおして浮かび上がってきた「情報化が子どもに与える影響」をめぐる現状と課題は、次のようにまとめることができるだろう。

第1に、「インターネット依存」傾向について、児童・生徒自身が自覚している程度に比べ、保護者の認識は十分ではないという点を指摘しなければならない。保護者の認識する「インターネット依存」傾向は、児童・生徒自身の認識よりも低くなる傾向にあった（第1節）。また、携帯電話を所有・使用している小学生が、自身では「インターネット依存」傾向を認識しているのに対し、保護者はそれを見逃しているという点も、この傾向を裏づける（第3節）。

第2に、保護者は、子どもに「インターネット依存」傾向がみられる場合それをまったく看過しているわけではなく、一定の危機意識を抱いてはいる。このことは、「インターネット依存」傾向が高い中学・高校生の保護者は、子どものインターネット利用にメリットよりもデメリットを強く見いだしていることから裏づけられる（第6節）。

第3に、「インターネット依存」傾向への対応として、多くの保護者は子どものインターネット利用についての指導をおこなっている。しかし子どもの年齢が上がってくると、「インターネット依存」傾向に直接に対応した指導はしだいに困難になってくる（第5節）。ここからは、（児童・生徒調査のまとめでも指摘されたように）急速に進展する情報化のなかで、それに素早く適応していく子どもに対し、保護者の認識・対応はつねに後手にまわらざるをえなくなっているという現状がみてとれる。

第4に、しかしながらそうした状況に対して保護者・家族はまったく無力なのではない。家庭・親子関係が良好であれば「インターネット依存」傾向は低くなるということは、情報化の進展のなかで、子どもにとっての日常生活世界、とりわけ第1次集団としての家族におけるコミュニケーションがますます重要なものになっていることを示唆している。

インターネットが可能にする見知らぬ他者との「出会い」などの非日常的な世界は、子どもにとってもたしかに魅力的なものであろう。そうした新たな世界の魅惑が、インターネットへの過度の依存や逸脱行動などのデメリット（情報化の「影」）に結びつくことを可能な限り防ぎ、情報化のメリット（「光」）を子どもたちができる限り享受しうるようになるためにも、家族は今後ますます重要な役割をはたすであろうということを、最後に強調しておきたい。